

## 私とボランティア

私は今、ボランティアグループに所属している。私が所属しているボランティアグループは、地域に住む知的障害者の方々と遊び、共に休日を過ごすというものだ。知的障害者の人は日頃、健常者とは別の学校・職場に通い、健常者とは隔たりをもって暮らしている。そのため、私たちが日頃誰かと遊びに行くように、彼らも誰かとどこかに遊びに行く、ということがあまりできていないのではないか。そういう考えのもと、彼らのためにそのような場を設けてあげたいというのがこのグループの目的である。そしてこのグループでは、健常者と障害者の隔たりをなくしたいということから、彼らのことを「仲間」と呼んでいる。

そもそも私がこのボランティアを始めたきっかけは、中三の夏休みの宿題だった。宿題として参加した当初は、仲間と接することへの不安や、宿題でボランティアなんて面倒くさいといういい加減な気持ちしか抱いてなかった。それが今では、宿題でもないのに自主的に活動に参加している自分がある。ある日突然、自分はなぜこの活動に参加しているのだろう、と自分自身に問うてみたことがある。

初参加のとき、もちろん初めてのことでなければ、正直とまどいの連続だった。何回も同じことを言ってくる仲間がいたり、ペアだった男の子がパニック状態を起こしてしまったり。しかし、そんな数々のとまどいがあったにも関わらず、それを「嫌だ、早く終わりたい」と思う自分はいなかった。なぜなら、「嫌だ」と思う以前に、ただ私自身が「楽しかった」からである。私が活動に参加してまず思ったのは、このグループではボランティアと仲間が、本当に普通の友達のように接しているということだった。もちろん会話にしたってそうだし、ちよっかいを出し合ったりじゃれ合ったりだつていくらでもする。それによってグループ全体の空気は和むし、仲間もとても楽しそうだ。そして何より、そんな光景を見ている私自身がとても楽しかったのである。

それから、活動中に学ぶことが多かったのも、私が何一つ嫌だと思わなかった理由の一つであろう。私かとまどつてるとき、他のボランティアの人が何回も私を助けてくださった。そのことによって私は、仲間との新しい接し方を学んだ。ただそのことが楽しかったのである。接し方を学び、彼らに慣れていくことによつて、どんどん彼らと接することが楽しくなってくる。そのことも、私が今、ボランティアに自主的に参加している理由でもあるだろう。

仲間と友達のように接する。これがこのボランティアグループの当初の目的であり、また、この目的を果たしているというのがこのグループのいいところであろう。もう一つ、このグループがすごいなと思うのが、毎回活動のあとに反省会を行うことだろう。それぞれが、一日ペアの子と過ごしての感想を述べ、それについてみんなで意見して追究していく。他のボランティアの人の感想を聞いて感銘することもあるし、そこで学ぶことは数多くある。もともとテイスカッションなどがあまり得意ではない私だが、しかし私にとって、活動後のこの反省会はすごく大切な場だ。

「ボランティア活動をしている」と友人に言うと、よく「偉いね」と言われる。そう言われると、私はいつも返事に困ってしまう。別に偉いねと言われたくてボランティア活動をしているわけではないし、ボランティアとは言ふものの、私自身はボランティアしてあ

げている、奉仕してあげていると感じたことは一度もない。むしろ、こっちはお金も払わずに楽しませてもらっていて、逆に申し訳なくなるほどである。他のボランティアの人だつてきつと同じであろう。ボランティアしてあげている、奉仕してあげている、なんて思いながらやつたつて楽しくもなんともなく、逆に苦痛であろう。そんなことを思っていたら、参加し続けることなど不可能である。仲間が楽しんでいて私たちも楽しんでいる。これこそ仲間と私たちが「対等な立場」にあるのである。私に「偉いね」と言つた友人は、世間の代表であろう。恐らく、世間の人々も同じように私たちのことを「偉い」と思っているだろうし、ボランティア活動に奉仕してあげることだと思つているだろう。でも私は世間の人々に言いたい。私は決して偉くない。自分が楽しいから—自分のために—この活動をしているのだと。

このように私は今、楽しく活動に参加しているわけだが、同時に、グループは大変厳しい現状にたたさされている。大変嬉しいことに、私たちのグループを親しみ、喜んで利用してくれる仲間はたくさんいる。しかしその一方、活動をする上で最も欠かせないもの—ボランティア—の数が不足しているのである。グループに所属しているメンバーもあまり多くはないので、一般の人からも募集をするのだが、あまり集まらない。参加希望の仲間はたくさんいるのに、ボランティア不足のために参加を断らなければならないときもある。最終的には、ボランティア不足を理由に活動日自体を大幅に減らすことにまできってしまった。これは非常に悲しい現実である。一時は、このボランティアグループ自体をなくしてしまおうという案も出た。それほどこのグループの状況は厳しいのである。しかし、仲間にとつてこのような場がなくなってしまうのは、今後楽しみが一つもなくなってしまうことであり、仲間の保護者の方からも絶対になくさないでほしいという声もあがっていた。「何らかの形でこの活動を継続させたい」。それが私たちの出した結論だつた。

つい先日、数少ない活動に参加してきた。そのときの反省会でみんなで話していたこと—。「やはり彼らにとつてこの場は必要だ」。厳しい現状にたたされつつも、やはり彼らの楽しそうな姿を見られるのは嬉しいし、何より私たちが励まされる。このような場は絶対に必要だ。みんなの想いは一緒だつた。

現在、世間には、まだまだ世間から取り残されている知的障害者がたくさんいるだろうし、また、そんな彼らを軽蔑している人々もいるであろう。まず、この悲しい現状を変えるためには、今現在活動している私たちが活動を絶やさないこと、そして、より多くのボランティアを集め、ボランティア活動をより大きくしていく必要がある。仲間が利用しやすい環境、そして軽蔑している人が軽蔑できなくなるような世間にしていきたい。実際、それを行うのが困難であるのだろうが、それを行うよい方法は、今後活動していく中で見つけていきたいと思う。健常者と知的障害者の対等—。このことが叶う未来が遠くならないために、私は私なりに、今の活動を続けていきたいと思う。私はまだ高校生という立場にあり、グループの運営の中心は他のボランティアの方に任せてしまつている。しかしいつか、私がグループの中心になつて、このグループを守つていけたら、この活動を永遠のものにしていけたらと思つている。